

作成日 2024年6月18日

修正日 2025年6月26日

株式会社UPDATER

REPORT

土壌診断 レポート



1. 農園・圃場データ

■農園データ・調査項目

農園名	中沢試験畑（環境を考える相模原の会）
採土日	2024年5月14日
調査項目	炭素量/窒素量/CN比、一般生菌数/大腸菌群数/大腸菌数
分析機関	㈱川田研究所、㈱dot science

■圃場データ

圃場 1	不耕起
土壌分類	腐植質厚層アロフェン質黒ボク土* ¹ （参考）
栽培作物	ライムギ

圃場 2	耕起
土壌分類	腐植質厚層アロフェン質黒ボク土* ¹ （参考）
栽培作物	なし

*1 日本土壌インベントリー（<https://soil-inventory.rad.naro.go.jp/>）にこのスポットの地質データなし。そのため、最も近い農地を参照。

2. 土壌診断結果

圃場名	検査項目	(単位)	採土日				
			2024/5/14				
圃場 1 < 不耕起 >	全炭素	(g/Kg)	71.8				
	全窒素	(g/Kg)	5.5				
	C/N比	—	13.1				
	一般生菌数	(1000万cfu/g)	9.9				
	大腸菌群数	(1000cfu/g)	0.015				
	大腸菌数	(1000cfu/g)	n.d.				
圃場 2 < 耕起 >	全炭素	(g/Kg)	70.9				
	全窒素	(g/Kg)	5.4				
	C/N比	—	13.1				
	一般生菌数	(1000万cfu/g)	7.5				
	大腸菌群数	(1000cfu/g)	0.003				
	大腸菌数	(1000cfu/g)	n.d.				

3. 考察

- ・日本土壌インベントリーには、このGPS地点の地質データの記載がありませんでした（地目が「宅地」と思われます）。
- ・最も近い農地の地質データでは、土壌分類：腐植質厚層アロフェン質黒ボク土、土壌炭素濃度：4.08%、仮比重：0.82g/cm³(*2)となっており、これが参考値となります。
- ・圃場1、2とも土壌炭素量（全炭素）が非常に多い結果でした。最も近い農地の土壌炭素濃度(4.08%)と比較すると1.7倍ほどの値となります。原因は不明ですが、宅地造成の際に客土された可能性も否定できません。
- ・窒素量、C/N比とも、作物栽培を行う上での適正範囲にあります。
- ・圃場1、2の土壌炭素量、窒素量ともにほぼ一致しており、農法による違いを比較する出発点として都合の良い結果でした。
- ・一般生菌数は、圃場1、2とも非常に多い結果でした。土壌採取の際の触診でも良好な団粒が形成されていたため、土壌微生物の活発な働きによって、作物生産に適した土壌環境が作られていると推定できます。
- ・大腸菌は非検出（n.d.）で、作物の菌汚染や公衆衛生上の問題は有りません。農作業を行う上でも安心です。
- ・以上から、圃場1、2とも作物栽培に適した土壌であり、不耕起栽培と耕起栽培の比較検討を行う条件が整っています。

ご参考（判定基準）

	★★★	★★	★	なし
土壌炭素	+30%以上	+10~30%	±10%以内	-10%以下
C/N	10~20	—	—	10以下、20以上
菌根菌胞子数	500以上	200以上	50~200	50以下
菌根共生率 一般	40%以上	20%以上	10~20%	10%以下
アカザ、アブラナ科	20%以上	10%以上	5~10%	5%以下
一般生菌数	1億 cfu/g以上	1000万 cfu/g以上	100万~1000万 cfu/g	100万 cfu/g以下
大腸菌数	非検出	—	—	検出

みんな大地

緑豊かな大地は、地球とみんなを元気にする。

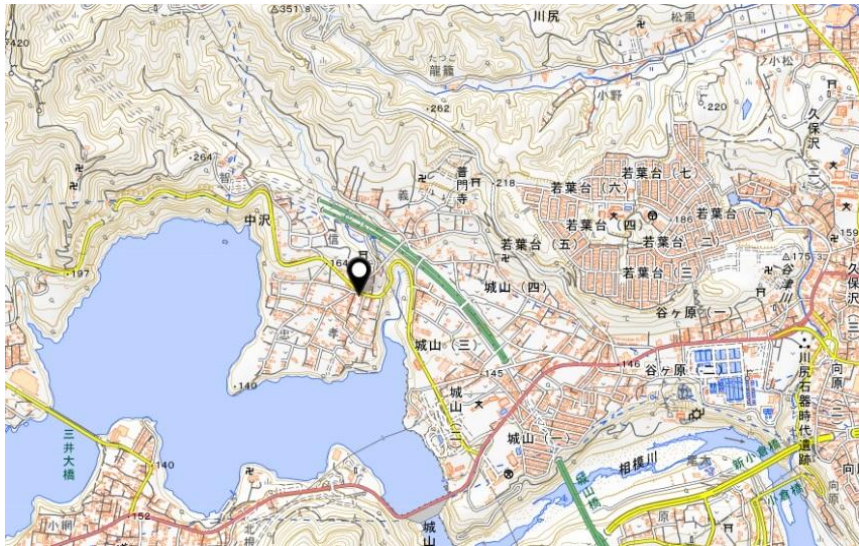
「土壌」は1兆5000億トンの炭素を貯留する重要なCO₂吸収源であり、多様な微生物を育み、地上の豊かな生物を支える役割を果たしています。「みんな大地」は、土壌診断サービスによる「土壌の見える化」を行い、土壌再生による地球温暖化防止効果と農業生産性向上をめざしています。

公式WEBサイト
はこちら▼



参考資料

地図上の圃場の位置（日本土壌インベントリー）



土壌のCO₂吸収「見える化」 サイトで、最も近い農地



- ・ 土壌炭素濃度：4.08%
- ・ 仮比重：0.82g/cm³